

# ハッセとヴェーバーの間：1765年から1830年までの ドレスデンにおけるオペラ上演に関する予備的考察<sup>1</sup>

大河内 文恵

## はじめに

18世紀半ばのドレスデンは、当時ヨーロッパの中でも指折りの音楽都市として名声を博していた。ザクセン宮廷オーケストラは名門として知られ、その編成の配置図がルソーの『音楽事典』に掲載されたことにより、後世まで残ることとなる<sup>2</sup>。とくにフリードリヒ・アウグスト2世 (Friedrich August II 1696-1763, 在位 1733-1763) の治世には、宮廷楽長 J. A. ハッセ (Johann Adolf Hasse, 1699-1783) を中心としてイタリア・オペラがほぼ毎年上演され、ドイツ語圏の諸都市におけるイタリア・オペラ的一大上演地として知られた。

一方、19世紀半ばのドレスデンはヴェーバー (Carl Maria von Weber, 1786-1826) とその2代後の後任ヴァーグナー (Richard Wagner, 1813-1883) が宮廷楽長となっていた時代で、彼らはともにドイツ・オペラをイタリア・オペラやフランス・オペラに並ぶ主要オペラに押し上げた立役者でもあった。

従来、ハッセが退任した1763年からヴェーバーが宮廷楽長であった1817~1826年頃までにかけての時期のオペラは2つの方向から研究されてきた。ハッセが宮廷楽長を務めた時代の延長として、ドレスデンにおけるイタリア・オペラの系譜を追うという方向と、ヴェーバーやヴァーグナーからドイツ・オペラの生成を遡る方向である。前者の代表的研究は、ラントマンの1765年から1817年のドレスデンにおけるイタリア・オペラの上演データをまとめたものである<sup>3</sup>。ハッセがドレスデンを去った1763年からヴェーバーが宮廷楽長に就任する1817年までを網羅しているが、タイトル通り、イタリア・オペラのみを扱っているため、それ以外の言語によるオペラの状況はわからない。後者には、メイヤーのヴェーバーとドイツ・オペラについて扱ったものがあるが<sup>4</sup>、こちらではドイツ・オペラ以外の状況が見えてこない。この時期のオペラについて知るには前からと後ろから、つまりどちらか片方ではなく、イタリア・オペラとドイツ・オペラの両方の視点を入れることが必要なのである。

この時代とほぼ同時代に書かれた研究書にもオペラの上演状況についての記述がみられる。プーレルスの『ドレスデン宮廷劇場の歴史：初期から1862年まで』によれば、フリードリヒ・アウグスト3世 (Friedrich August III 1750-1827, ザクセン選帝侯在位 1763-1806、ザクセン王国国王在位 1806-1827) 時代には、1781年にドイツ演劇団が作られ、フランスやイタリアのオペレッタを上演していたが、1785年に初めてドイツ・オペラが上演され、その演目はモーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791) の《後宮からの誘拐》であった<sup>5</sup>。1791年からはヨーゼフ・ゼコンダのオペラ団により、宮廷からの補助金なしでドイツ・オペラが定期的に上演されるようになったということである<sup>6</sup>。これらを資料的に裏付け、検証することも必要であろう。

## 1 上演調査

ドレスデンの上演調査をするにあたり、2000年からボン大学で行われ、2018年8月からマインツのグーテンベルク大学のサイトで公開されている、イタリアとドイツのオペラ調査のデータベース<sup>7</sup>を利用した。このデータベースは「1770～1830年のイタリアとドイツのオペラ Die Oper in Italien und Deutschland zwischen 1770 und 1830」と題するもので、1800年前後のドイツにおけるイタリア・オペラとフランス・オペラの受容と影響に重点が置かれ、19世紀になってドイツの独自性がどのように獲得されたかを探求することを目的としており、ウィーン・ドレスデン・ベルリン・ミュンヘン・ワイマールでのオペラ上演がデータベース化されている<sup>8</sup>。

筆者は現在、このデータベースの追跡調査と補完のための調査をおこなっているが、その予備的段階として、現在構築されているデータベースから読み取れることを整理し、考察することとした。このデータベースはオペラのタイトルや台本作家、作曲家で検索できるのはもちろん、初演地や再演がおこなわれた上演地も検索条件にすることができる<sup>9</sup>。

以下、抽出手順を記す。

### 抽出手順：

「上演地で検索 Suche nach Aufführungen」を開き、「上演地 Aufführungsort」にDresdenを入力して検索する。検索結果には、上演シリーズのタイトル、作曲家、場所（劇場）、年のみが記され、それぞれソートすることが可能である。その結果を「年」で昇順にしたものに、台本作家と言語の情報を加えたものを作成した<sup>10</sup>。ただし、このデータベースはタイトルの通り、1770年からを対象としており、それ以前に上演されたものは1770年以降に1回でも再演されたものに限られている。そのため、この期間に限り、ラントマンのデータから情報を補足した。なお、1つのオペラは一度初演されたら、1回の上演で終わりということはほぼなく、数回～数十回の再演がおこなわれる。それは年度内におさまることもあれば、数年後まで続くこともある。本来はそれらの回数もすべて数えた上で上演数を出すべきであるが、今回は全体の傾向を把握するという目的のため、初演のみを対象とした。

## 2 オリジナル言語別オペラ上演数

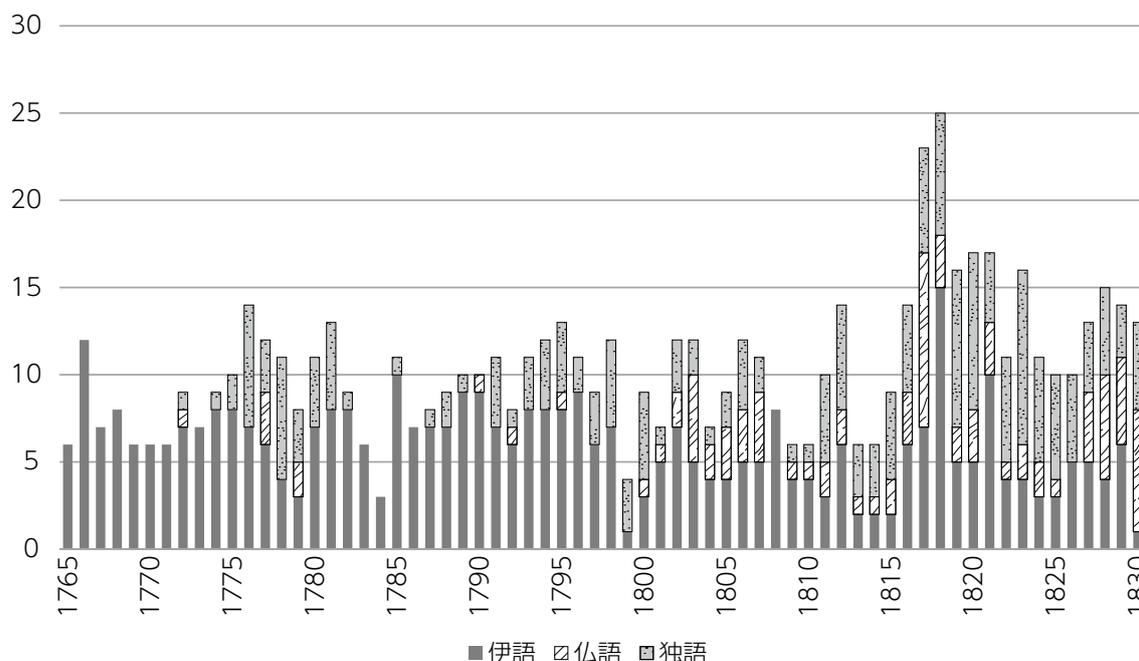
1765年から1830年の各年におけるオリジナル言語ごとのオペラの本数をグラフで示したのが【表1】である<sup>11</sup>。ここでいうオリジナル言語とは、そのオペラの台本および、作曲・初演された際の言語を指す。

1763年にフリードリヒ・アウグスト2世が死去した際、跡を継いだフリードリヒ・クリスティアン（Friedrich Christian, 1722-1763）は、ザクセンを七年戦争に巻き込んだ宰相ブリュール（Heinrich von Brühl 1700-1763）を解任し、財政の立て直しを図った。そのために宮廷楽長のハッセを始めとする楽団員を解任し、教会音楽など最低限の音楽だけを残して劇音楽を廃止した<sup>12</sup>。

フリードリヒ・クリスティアンはわずか2か月で亡くなってしまい、その第一子であるフリードリヒ・アウグスト3世が後継者となった。当時フリードリヒ・アウグスト3世は12歳だったため、叔父のフランツ・クサーヴァー（Franz Xaver, 1730-1806）が摂政についた。ドレスデンでオペラが再開されたのは、1765年5月で、プラハのブステッリ（Giuseppe Bustelli, 1731-1781）が劇場支配人に就任した。

この時点では、上演されたのはすべてイタリア・オペラであった。その状態は1771年まで

【表1】オリジナル言語別上演数



続く。最初の変化は1772年にあらわれた。この年にはドイツ語オペラとフランス語オペラが1本ずつ上演されたのである。ドイツ語オペラの作曲者はヴォルフ (Ernst Wilhelm Wolf, 1735-1792) で、彼はヴァイマルで選帝侯妃アンナ・アマリアの息子たちの音楽教師をしており、1772年にヴァイマルの宮廷楽長に就任した。ヴァイマルはザクセン=ヴァイマル=アイゼナハ大公国の首都で、ザクセン選帝侯国とは同じヴェッティン家である。ヴォルフはヒラー (Johann Adam Hiller, 1728-1804) の影響を受け、オペラを作曲する際にはイタリア・オペラではなく、ドイツ語のジングシュピールを作曲していた。1772年2月10日にヴァイマルで初演されたこのオペラが5か月後の7月10日にドレスデンで上演されたということは、ヴォルフのお披露目の意味合いが強かったのではないかと考えられる。

1772年に上演されたフランス・オペラはモンシニー (Pierre-Alexandre Monsigny, 1729-1817) によるもので、この《脱走兵》は彼の出世作である。1769年5月6日にパリで初演されると、ドイツで評判となり、1772年のドレスデンでの上演をはじめ、1776年にミュンヘン、1779年にヴィーンと各地で上演された。ただし、フランス語のまま上演されたのはドレスデンのみで、他の都市ではドイツ語で上演されている。その後、1773年と1783年、1784年はイタリア・オペラのみだが、それ以外の年にはドイツ・オペラが毎年、フランス・オペラもドイツ・オペラに比べれば少ないがコンスタントに上演されている。

### 3 上演言語別オペラ上演数

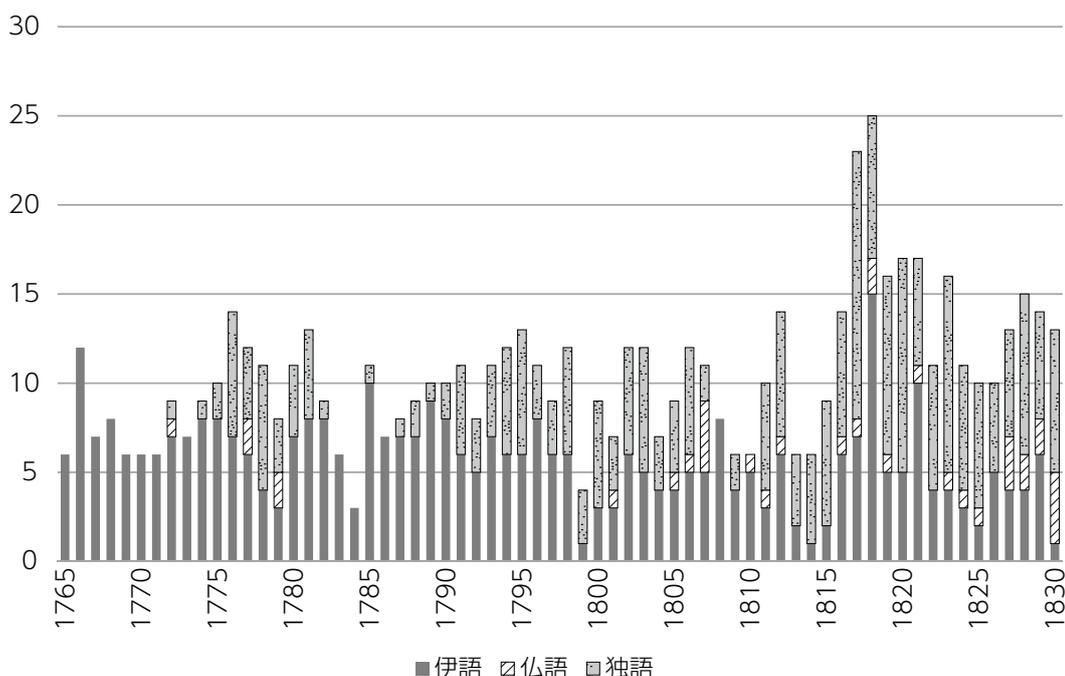
今回の調査で、この時期にドレスデンで上演されていたオペラのうち、少なくない数のオペラがオリジナルではなく翻訳されて上演されていた可能性があることがわかった。とくにフランス語のオペラはドイツ語で上演されることが多い。タイトルから一見、ドイツ語オペラに見えるものも元を辿るとフランス語オペラであるケースがしばしばみられるのである。そこで、オリジナル言語ではなく、実際に上演された言語での上演数をグラフにしたのが【表2】である。

【表1】と【表2】とを比べてみると、フランス語が圧倒的に減り、イタリア・オペラとドイツ・オペラに収斂されていることがわかる。ただし、フランス・オペラは完全になくなってしまいうわけではなく、1780年代から1800年にかけていったんなくなったフランス語が1801年か

ら復活し、1820年代後半にはむしろ増える傾向にある。その傾向は、イタリア・オペラの減少とリンクしている。

1765年に劇場支配人に就任したブステッリは1778年に辞めており、その年の7月から1780年3月までイタリア・オペラは閉鎖された<sup>13</sup>。グラフではその間にもイタリア・オペラが上演されたように見えるが、その期間はドイツ・オペラが集中的に上演され、1779年に上演されたイタリア・オペラはそれまでと違って、上演劇場が不明なもの、通常の劇場でないものである。すなわち、宮廷オペラではなく、移動オペラ団など外部団体による上演であった可能性が高い。ブステッリがいない間に上演されたドイツ・オペラがその後定着したとみることもできるだろう。

【表2】上演言語別上演数



#### 4 ドイツ語オペラの割合

では、ドレスデンではドイツ・オペラは増えたのか。毎年の上演オペラ数は一定ではないため、全体数におけるドイツ語の割合を、最初からドイツ語で書かれた「独語オペラ」と他の言語で書かれたオペラをドイツ語にして上演した「独訳オペラ」に分けてグラフにしたものが【表3】である。

ドイツ・オペラの割合の多さには大きく3つの波があり、1778年を中心とした第1の波、1800年を中心として第2の波、1810年から1820年代半ばにかけての第3の波である。第1の波の要因は上述の通り、劇場支配人ブステッリ退任に伴うイタリア・オペラ閉鎖の影響である。ザクセン選帝侯国は1806年にザクセン王国となる。ナポレオン率いるフランス軍にオーストリアが敗北したことにより、神聖ローマ帝国は1806年8月に崩壊した。その流れを受けてザクセン選帝侯国はその年の12月に選帝侯国から王国へ昇格したのである。第2の波は、1800年を頂点とするというよりはむしろ、第2と第3の波は大きく1つの波で、1806年から数年間の落ち込みがあると見做したほうがよいのではないか。

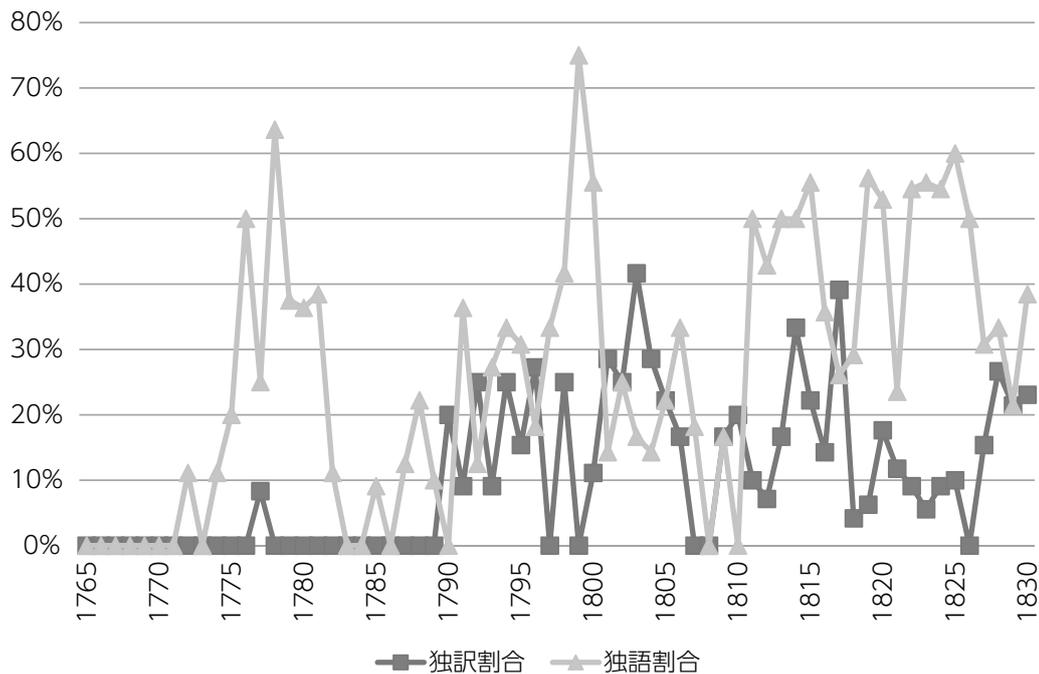
このグラフではドイツ語オペラの割合と独訳オペラの割合との相関関係はあまりないように見えるため、上演言語別に同様のグラフを作成したものが【表4】である。

【表4】をみると、ドイツ語の割合と独訳の割合は、ほぼ一致した傾向を示している。すなわち、ドイツ語オペラと独訳オペラの機能は大きく変わることはないということである。ドイツ語

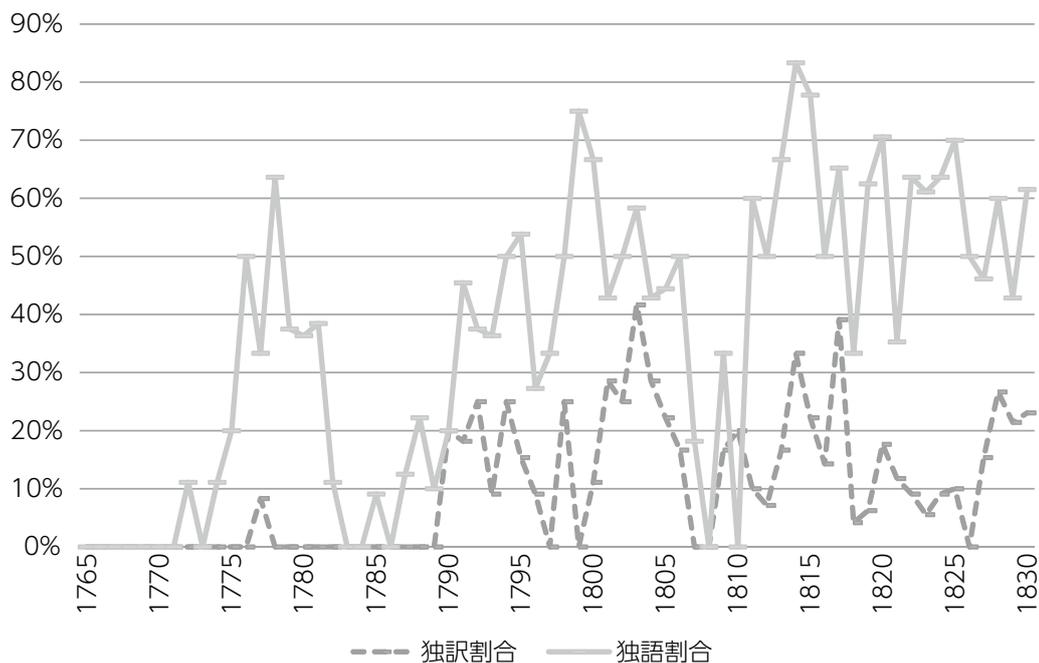
オペラが好まれていった事情には、オペラというジャンルが宮廷内のものだった18世紀から、宮廷に拠点がありながらも、広く市民に解放されていった過程で、言葉のわからないイタリア語やフランス語よりは誰でもわかるドイツ語が受け入れられていったと考えることができる。それは、独訳オペラの存在からも裏付けることができるだろう。さらに、数は少ないがイタリア・オペラで独訳されたものが存在することも傍証となろう。

もうひとつの要因は、ドイツの民族意識の高まりである。フランス・オペラやときにはイタリア・オペラをドイツ語で上演していたのはドレスデンだけではなく、ヴィーンをはじめ、ベルリンやミュンヘン、ヴァイマルでもおこなわれていた。つまり、ドレスデンの特殊事情ではなく、まだドイツという国は存在してはいないが、すでに「ドイツ的なもの」を求める雰囲気少しずつ広がっていたのではないか。そう考えると、フランス・オペラはフランスものを楽しむという

【表3】オリジナル言語別・ドイツ語の割合



【表4】上演言語別・ドイツ語の割合



よりも独訳オペラの供給源として利用されたとも考えることができる。

ドイツ語のオペラが増えていく要因をさらにあげるとすれば、宮廷の作曲家がドイツ語のオペラも作曲するようになっていったこともその1つといえる。ハッセの時代には、宮廷楽長はイタリア・オペラだけを作曲していた。後任のナウマン (Johann Gottlieb Naumann, 1741-1801)、パエール (Ferdinando Paer, 1771-1839)、モルラッキ (Francesco Morlacchi, 1784-1841) まではほぼイタリア・オペラのみだが、ライシガー (Carl Gottlieb Reissiger, 1798-1859) は逆にドレスデンではドイツ・オペラのみを作曲しており、宮廷作曲家のシュースター (Joseph Schuster, 1748-1812) やザイデルマン (Franz Seydelmann, 1748-1806) になるとイタリア・オペラもドイツ・オペラも作曲している。

プレールスのいう、1791年からの定期的なドイツ・オペラ上演というのは、おそらく第2・第3の波のことであろう。彼が指摘しているモーツァルトやハイドン (Joseph Haydn, 1732-1809) のオペラの上演はたしかに目を引くもので、モーツァルトのオペラは19世紀に入ってから繰り返し上演されている。同じような傾向がロッシーニにも見られ、ドレスデンのオペラ上演は宮廷楽長や宮廷作曲家によるものに限るという18世紀の常識から、人気のある作品は内外問わず上演するという19世紀のやりかたへ切り替えられていったといえる。

今回の考察では1830年までだったデータを1840年代まで広げ、初演だけでなくすべての公演をデータ化してさらに正確な分析をすること、データそのものの精査をおこなうとともに、1つ1つの上演の背景を調査することによって、データからみられる傾向を跡づけていくことを今後の課題としたい。

## 主要文献

Fürstenau, Moritz. *Beiträge zur Geschichte der königlich-sächsischen musikalischen Kapelle*. Dresden, 1849.

Landmann, Ortrun. *Die Dresdener italienische Oper zwischen Hasse und Weber : ein Daten- und Quellenverzeichnis für die Jahre 1765-1817*. Dresden : Sächsische Landesbibliothek, 1976.

Meyer, Stephen Conrad. *Carl Maria von Weber and the Search for a German Opera*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.2003

Prölss, Robert. *Geschichte des Hoftheaters zu Dresden: Von seinen Anfängen bis zum Jahre 1862*. Dresden: Wilhelm Baensch Verlagshandlung, 1878.

Rousseau, Jean Jacques. *Dictionnaire de musique*. Hildesheim : Georg Olms 1969[Paris:Duchesne 1754].

## 注

- 1 本研究はJSPS 科研費、基盤研究 (C) 18K00123 の助成を受け、その成果の一部である。
- 2 J. J. Rousseau, *Dictionnaire de musique* の付属資料、図Gにある。https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k850406b/f589.item で見ることができる。
- 3 Landmann 1976. 1765年から1817年にドレスデンで上演されたイタリア・オペラをタイトルのアルファベット順に配列し、それぞれの初演地・初演年月日に加え、ドレスデンでの上演日を再演すべてを含め、上演会場とともに挙げている。ザクセン州立=大学図書館に楽譜や台本の所蔵があるものは、所蔵番号とともに記載し、巻末には年代別のリストと作曲家別のリストも掲載されている。
- 4 Meyer 2003.
- 5 Prölss 1878. pp.230-231.
- 6 同年、モーツァルトの《コシ・ファン・トゥッテ》やハイドンの《騎士オルランド》も上演された。Prölss 1878. pp.231.

- 7 Die Oper in Italien und Deutschland zwischen 1770 und 1830.  
<http://www.oper-um-1800.uni-mainz.de/>
- 8 このプロジェクトから既に出ている研究成果については、[http://www.oper-um-1800.uni-mainz.de/projekt\\_ergebnisse.php?herkunft=projekt.php](http://www.oper-um-1800.uni-mainz.de/projekt_ergebnisse.php?herkunft=projekt.php) を参照。
- 9 ボローニャ大学によるオペラ台本データベース Corago:Repertorio e archivio di libretti del melodramma italiano dal 1600 al 1900 (<http://corago.unibo.it/>) はイタリアに力点が置かれているためにドイツにかんしては（遡及入力されているものの）調査が遅れており、何より初演地でしか検索できないために、上演調査には向かないが、補助的に使用した。
- 10 オペラのタイトルは検索した時に表示されたものをそのまま使用しているため、通常目にするものと言語が異なっている場合がある。オリジナルの言語でない場合には備考にオリジナル・タイトルが入れている。上演地はすべてドレスデンなので省略し、劇場のみを記載してある。言語の項目は、言語1にドイツ語以外の言語、言語2にドイツ語を記載し、それぞれの言語名は図書館記号の言語コードを使用した。本稿では紙幅の都合上、抽出した表自体は掲載しないが、いずれ公開する予定である。
- 11 オペラの年間本数を数える場合には、オペラのシーズンを考慮し、そのシーズン毎に記するのが通常だが、ドレスデンの場合、いわゆるシーズン以外にもほぼ毎月のようにオペラが上演されており、シーズンで区切ることに意味がないため、1月で区切った。なお、ラントマンも同じ方法を用いている。
- 12 Prölss 1878. pp.210-211.
- 13 Landmann 1976. p.133.